

Collegium Musicum del Cervo

コレギウム・ムジクム・テル・チェルボ

第10回定期演奏会

土曜の午後はステキにクラシック

8月30日(土) 14:00開演(13:30開場)

たんようウェルネスパーク(加古川ウェルネスパーク)

アラベスクホール

加古川市東神吉町天下原370 TEL: 079-433-1100

入場無料

W.A. モーツァルト

ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137

ヴァイオリン協奏曲第3番 ト長調 K. 216

ヴァイオリン独奏 安東 優歌 (客演)

F.J. ハイドン

序曲 二長調 Hob.Ia:4

交響曲第104番 二長調 Hob.I:104
「ロンドン」

後援 加古川市教育委員会 / 加古川フィルハーモニー管弦楽団

ホームページ

<http://collegium-musicum-del-cervo.net/>

f コレギウム・ムジクム・テル・チェルボ



※小さなお子様と一緒にご鑑賞いただけるチャイルドルームもございます。お気軽にご来場ください♪

■ JR・バス

JR 加古川駅下車、神姫バス約20分「ウェルネスパーク」下車

■ 車

加古川バイパス「加古川西ランプ」より北へ約1km、
「東神吉西」交差点を右折し東へ約1.2km、
ウェルネスパーク案内板を左折し北へ約0.9km。

山陽自動車道「加古川北IC」より南へ約6km、
「東神吉西」交差点を左折し東へ約1.2km、
ウェルネスパーク案内板を北へ約0.9km

お問合せはこちらから➡



Profile

ヴァイオリン独奏 安東 優歌 Yuka Ando

3歳からバイオリンを始め、朝枝信彦氏に師事。

第26回万里の長城杯国際音楽コンクール高校生の部 第1位ならびに審査員特別賞受賞。

第2回日本国際音楽コンペティション高校生の部 第2位。第3回芦屋音楽コンクール高校生の部 第2位。第49回全日本ジュニアクラシック音楽コンクールヴァイオリン部門高校三年生の部 第3位。

嶽崎あき子率いる弦楽合奏団「TAKEZAKI」メンバー。

これまでに、Friedemann Eichhorn、Annette von Hehn 各氏のマスターコースに参加。

現在、嶽崎あき子氏に師事。

コレギウム・ムジクム・デル・チェルボ (Collegium Musicum del Cervo)

兵庫県加古川市を拠点として、2012年に誕生。30代から60代までの幅広い年齢層のメンバーで構成される室内合奏団。加古川の旧表記「鹿兒川」にちなみ、イタリア語で「鹿の音楽集団」と命名。通称、「チェルボ」(鹿)。

モーツァルトやハイドンなどの古典派の作品を主なレパートリーとしながら、あまり知られていない作曲家や楽曲を選曲し、メンバーが互いに議論することでチェルボ独自の作品の解釈を深める。アマチュアでありながら質の高い音楽作りを目指す。

現在メンバーは24名(ヴァイオリン9名、ビオラ3名、チェロ3名、コントラバス1名、フルート2名、オーボエ1名、クラリネット2名、ファゴット2名、ホルン1名)。

Notes

ディベルティメント 変口長調 K.137 (W.A.モーツァルト)

K.137は、1772年、モーツァルトにより作曲された弦楽四重奏のための作品です。この曲は、3つの楽章から成り、軽快で明るい旋律が特徴です。第1楽章はアンダンテで、優雅で穏やかな雰囲気を持ち、聴く者をリラックスさせてくれます。第2楽章のアレグロ・ディ・モルトは、活気に満ちたテンポと流れるようなメロディが印象的で、モーツァルトの若々しいエネルギーが感じられます。(通常のクラシック曲に聴きなれていると、順番が逆に感じられるかもしれませんが、これで合っています。)第3楽章のアレグロ・アッサイは、軽快でリズムカルなフィナーレを提供し、全体の締めくくりとしてふさわしいものとなっています。このディベルティメントは、モーツァルトの初期の作品の一つであり、彼の作曲技術と創造性が十分に発揮されていますので、是非お楽しみください。

ヴァイオリン協奏曲第3番 ト長調 K.216 (W.A.モーツァルト)

この曲は全5曲あるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲の中で、1775年にザルツブルクで作曲された3番目の曲です。

第2番が作曲されてからたった3ヶ月後に作られたこの曲は、前作をはるかに超えた傑作とされています。

この時モーツァルトはわずか19歳と天才ならではの早熟ぶりを見せていますね。

チェルボでは初めてのヴァイオリンコンチェルトをどうぞお楽しみください。

序曲 二長調 Hob.Ia:4 (F.J.ハイドン)

この序曲は失われたと考えられていた自筆譜が、1960年にたまたま発見されたもので、詳しいことは何もわかっていません。耳慣れたオペラの序曲とは異なっており、何かの交響曲の一楽章だったのかもしれないし、劇のための音楽だったのかもしれない、と想像は膨らむばかりです。

皆さんはお聞きになって、どのように感じられるでしょうか？ぜひ、想像してみてくださいね。

交響曲第104番「ロンドン」 Hob.I:104 (F.J.ハイドン)

ハイドンは、オーストリア=ハンガリー帝国の宮廷音楽家だった30年間で92曲もの交響曲を創作し、その後産業革命で発展したロンドンでの公開演奏会用に発表した12曲も大ヒットしました。最後に発表した104番は、「交響曲の父」と呼ばれた彼の業績を讃え、後に「ロンドン」と名付けられました。

彼が100曲もの創作を通じて、交響曲を全4楽章のスタイルに昇華させるとともに、時代を経て機能性が高まった管楽器を自身の作品にどん欲に取り入れた業績は、モーツァルト、ベートーヴェン以降の交響曲作曲家に多大な影響を与えたことは言うまでもありません。